

150円。その150円を欲しくて、みんな歩いて行ったんだ。ここから。ここらのプラグの人が。あちこち頼まれで行くつうごどないがら。やっぱりイナガだば百姓のしごとであれば頼まれで行くつう、目名さ全部行ったんだ。目名で田んぼの仕事。田んぼとかハダゲのしごと。あどはナンも。あの、山とかそういうのはできないがら。やっぱり、田んぼどハダゲだけ。朝早いって、朝5時半に行っただよ。遅くて6時だの。せばはあ、目名さ行けば7時半もナンボになる。歩いて行くごどで。ほいでまだ帰れば5時半も6時もなんねば終わんねんだ。エさ来れば真っ暗。それで150円だつてよ。今だらさ、子どもどでも100円けでも100円ではおばあちゃんも買らいねってへるあ。むがし150円だつてんだ。だいいちんだの。3人、マど人間2人、3人（馬と人間あわせて3人、の意）でも一日2000円だしてなあ。今へば2000円たつてだも頼まれで行く人ねべな（笑）。ホントにまあ。苦勞のどんぞごでつた。」「わだしは△（名）だんだけど、じい（U氏のご主人の父）がほら、百沢がら出でて、やっぱり年いってきたら帰りたくなつたんだべ。行ってくればいいのつたの、そうしてらうぢ（亡くなってしまった）。（個人的な内容のため中略）ムガシの話、亡くなった娘さ教えてつたの。こうしてさ、一生懸命はだらいで、マ（馬）も使つてらつたの。むがし、バッコウってかげであつたの。それかげるさ、へて、よそのうちさ頼まれで行つて、そして父親を病院さやつてあつたのさ。妹に先をとらせて、馬と私とで3人して、やつてでも、いちにち、2000円がなんぼで、この下に☆さんって、田名部の人でね、その人が田んぼあつたごどで、毎年、売つてちょうだいつて、毎年売つてあつたの。そうして、3日行つたごどで、いい、いいつて、5000円あればいいつて。3日で3人して3人ではだらいで、5000円貰つたの。（個人的な内容のため中略）全然。まあ、ホントに小さいどぎがら貧乏した。貧乏のどん底だつた。」

呼称 「サルケ」と呼んだ。

年代・普及 U氏は、昭和22～3年頃から、昭和28～9年頃あたりまで、サルケが使われていたのを覚えているという。更に昔であれば、この集落の人はほとんどの人が使つていたのではないかと思うが、当時使用していた家は5～6軒程度であつたという。この集落でサルケの利用を始めたのはU氏の祖父にあたる△家の男性で、人を雇つてサルケの採掘をおこなつていたという。70歳くらいの人で、興味のある人であれば見た記憶があるだろうと考えている。「（△家の）本家のおじいちゃんだちが始めだんです。それがら、こんだほれ、W家（後出）だどが、□家だどが、ちょこつとやつてあつたけど、ホントのえの長ぐやつたのは△家のズイ（おじいさん）かなあ。ズイが人を使つてやつてあつたごどで。」「（サルケを使用していたのは）12～3から18～9歳のあたりまで。だいいちこの人さ、ウヂの弟でもだでも、聞いでも、サルケづごととは分がてるべたて、どうしてやつたんだが分がらねね。今のわがい人は。ホントに今のわがい人、それでもだいたい70ぐらいの人だら、ま、いぐらがしがた（姿）は見で、それでもやっぱりそういうのに趣味がなければ、ナンだこれ、づみたいなもの。趣味があれば、あれこれナンだべなあどもつて、気づけでみれば、これがサルケがな、みたいなものであつたけども、今の人だばちょっと。わがねね。」「昔はやつたつたんでねえがな。ちょっとな。昔にはほとんどまずやつてあんでねがな。ここらの人が。だけど今だばだれもしゃべても、年いったひとでねば知らねえともうな。ワイだちはごどで生まれでごどにいるしてさ、あの、たげこうむがしのこども覚えでるけど。うん。ちょっと記憶あるようなねえような。もどおれの土地改良区つてさ、改良区のまずこう、セギ掘つたりなんがすればほら、それで上げで干してアレしたりしてのは、きおぐにあるけどあどあんまりそう……。なもそれごそ12が13のあたりがら田んぼさ行つてはだらいだがら。掘り起ごせばほら、何ていうの、木の、木のでねえ、草の根が、あれをほら、乾がして燃やしたりしたの、それがここらのプラグど、大曲ど、ふた……に（「2つの集落で」と言いかけてやめたものと思われる）、やつたみたいだ。それはほら、よぐあの、ワダシがこう、母親が大曲がら出だ人だごどで、しよちゅう行つたり来たりしてだごどで、で、おじいちゃんがほらいでつたごどで、おじいちゃんがの。ジイこれなにすんのたきや、これの、あの、燃やすんだつて。ああ、これ燃えるもんだべおのうつて思つてたきややっぱり、つぎ（積み）がだもさ、ふち（普通）だばこうベタベタど積むんだと思ふんだけどの、で、母親の親がの、こういうふうに端っこだげ積んでこう、こうつて、円く積んで、風入るみて、乾ぐみたい、『あれ一、ジイこして積みばいいの』たきや、『こーつて積みばほら、乾ぐんだ』つてさ、ムガシの人つての、アダマがよふての。ここらのプラグでもそいやつたウヂが何軒もねどおもうよ。こうやつたウヂがの。5、6軒がな。せいぜい5、6軒だと思ふよ。そんなに多くなかたけど、ただその土地改良区で全部の田んぼほら、暗渠をしてアレしたごどで、それで出だのやつたごどで、けつきよぐ多ぐはねえだけどもやっぱりあのホントにそいふうにしてやつたづごどはあんまり、まず5、6軒がその程度のものだ。」「あど土地改良区だばここらの田んぼ全部やつたもんだごどで、かなりここらの田んぼもあるんでねがな。あ。（土地改良区でやる以前から何軒かは）やつてあつたの。やつたつたの。なんぼがはの。父親がなんぼが元気があつたごどはやつたつたのさ。父親がでぎなくなつてがら、わだし一人ででぎるわけねえし、チヂオヤ（父親）が寝でれば母親が付いでねばねえし、やっぱりでぎなくなつて、かえつてやめだつたけど、今でもウヂその田んぼさ行けばまだあるけどの。」

分布・質 U氏は、深さ60cm程度でもサルケがあらわれるが、土混じりであり、100cmほどの深さでは、「サルケだけ」の層になるという。サルケは、深く掘れば掘るほど「よい」サルケが採れたという。更に、200cmほどの深さに

至ると砂層となり、貝殻が混じるという。昔はここが海だったとU氏は考えている。

「上だば、クロツチ（黒土）があるわけだ。で、どうしてもいいどごは、シコップでだいたい60cmぐらい掘ればサルケが出で来るどごもあるんだって。だけど、60cmがナンボであれば、ツチが多いんだって。やっぱりだいたい、1



田であったところはいま、見る影もない（土手内）。

メートル位掘れば、ツチがなくサルケだけ。だがら上のツチをずーっとこう寄せで、だいたい決めてこのくらいに決めて、ずーと上のツチこう寄せで、きれいに寄せで、そしてがらこんだサルケ。」「その底を大体、1メートル位かな、1メートルまでいがないでもあれだど思うんだけど、大体このくらいも掘ればね、はあもうサルケっていうか木の、草の根が。それを掘って大体2メートルくらい掘ればね、砂だの。へてムガシはコゴは海でったど思うんだ。貝の殻。いっぱい出でくるの。やっぱりサルケもほら、そご（底）さいげばいぐほどいいツツ（土）のはいない（入らない）アレが出でくるってさ。ウヂのチヂオヤ掘たたの。そしたら、掘ったら掘ったら、貝の殻。貝の殻ど砂。けっこうアレだ。出であったもの」

採取の時期・場所 サルケの採取は、主に春におこなっ

た。人手のある人であれば、秋におこなう場合もあったが、忙しいため春におこなうのが普通であった。「春。春が、秋（アギ）たって、秋になれば田んぼこんだあの米刈ったあと、ワラ片付けたりなんがするがら、やるってば春。ま、人数いっぱいあるってアレだば秋やる人もあるけど、ほとんど春。」「（サルケを採取した場所は）田んぼ。じつとあっち。だいたいこがらなんぼ、1000メートルぐらいもあるがな。この集落のはずれね、今は柳がおがてるけどさ、あすこガッパリ田んぼだったの。今田んぼつぐってる人がの。こごのブラグの人で売った人があるわけ。田んぼ。×さんづんど、◇さんづひと。△家の別家の別家になってるのがな。その人だち3人が（「が」は格助詞ではなく「～かまたはそれくらい」という不確かさをあらわす副助詞）売ってる。そのふと、2人が、××部落の人だんだって。それが田んぼつぐってほら。あどは誰もつぐってない。前はホントにの、田んぼつぐってさ。今なんも田んぼつぐってね、柳ばりだもの。柳も柳、こんでるよ。けっきよぐハア、何十年もなるがら。」

採取の主体 U氏の父親が採取していたが、亡くなってしまったあとはU氏はその作業を受け継ぐことはできなかった。サルケを掘ることは、男の人でなければ難しいというイメージがあった。また、U氏は母の実家である大曲で、母方の祖父が採取していたのを見ている（「乾燥」の項参照）。「父親が早く亡くなってるがらさ、ま、そういうアレでさ、チヂオヤ早く亡くなったおかげでアダシががっこさも入れねえ、そしてアレして、やっぱりおどごの人でねばそういうのやるてもさ、やれないしてさ。ウヂでだばちょこつとやったんだがなあ。そういう感じはあるけど……。」

採取の目的 田を低くするために、客土することが目的であった。「けっきよぐ、田んぼもほら、たがいどごあり、ひぐいどごあるでしょ。ひぐいどごはいいけど、たがいどごはほら、どうしても土をあれしねばねえので、それごその上のツチを寄せで、いいツチをひぐいどごさ寄せで、その底を大体、1メートル位かな、1メートルまでいがないでもあれだど思うんだけど、大体このくらいも掘ればね、はあもうサルケっていうか木の、草の根が。それを掘って大体2メートルくらい掘ればね、砂だの。へてムガシはコゴは海でったど思うんだ。貝の殻。いっぱい出でくるの。やっぱりサルケもほら、底（そご）さいげばいぐほどいいツツ（土）のはいない（入らない）アレが出でくるってさ。ウヂのチヂオヤ掘たたの。そしたら、掘ったら掘ったら、貝の殻。貝の殻ど砂。結構アレだ。出であったもの。今は誰もハア、サルケもやらないし、今のこの時代にサルケだのさ、ああいうのさな、人に笑われるべたて。」

採取の方法と用途 表土をシコップで1mほど取り除き、サルケの層にタヂで切れ目を入れた。サルケ専用で作られた大きなクワで厚さ10～15cm、幅15cm、長さ30cm程度に掘り出した。U氏は、父親の手作りの道具を含め、当時使われていた道具には愛着があった。しかし、世代間の意見の違いから、残しておくことはできなかった。

「上だば、クロツチ（黒土）があるわけだ。で、どうしてもいいどごは、シコップでだいたい60cmぐらい掘ればサルケが出で来るどごもあるんだって。だけど、60cmがナンボであれば、ツチが多いんだって。やっぱりだいたい、1メートル位掘れば、ツチがなくサルケだけ。だがら上のツチをずーっとこう寄せで、だいたい決めてこの位に決めて、ずーと上のツチこう寄せで、キレイに寄せで、そしてがらこんだサルケ。そのサルケ切るのもタヂって、クロのフヂ切るの、アレでやったもんだ。アレでほれ、ドツと刺して寝せでまっすぐ刺してグッてやればいくから。そうして一つ採ればあどはこんだこやって採って。こうまっすぐやっってこう寝せで、こんだかだ（片）一方ばりやたてかだ一方がら採れないがら、まだこちがらまだこちやこう向けで。そういうふうにやっって、きれいにこう採れるわけ。シカグだらシカグ、ナガシカクだらナガシカグに。うちの孫じいさんはほら、しごど（仕事）きれいな人だったどごで、サ

ルケ積んででも、きれいに積んでるの。へば、『んいやや、××（U氏の実家の姓）のジだもの、きれいだなあ』って。ホント何やってもそういう人だったのさ。「今だばスコップでも何でもあるけど、あのあたりだばスコップでもながながないどごで、広いこういうクワを、（サルケ専用）に作（つぐ）ってもらって。それでほら。こうやって。フチ（普通）のクワとがスコップで上がらねもの。重いし、水吸って。厚さもだいたい10cmが15cmの厚さにして、それを15cmのなんぼ、30cmもあるのがなあ。それを割って、こうして燃やしたんだけどさ。」「（今、その当時の道具は残って）ないない。今だばどごでもないべ。ウヂでもあたたの、みなほら、こごさ小屋あたたのみななげで（捨てて）しまつて。そのあたりだばワダシ使つたバッコウもあたたんだよ。それもみななげでしまつて。やっぱり今のほら、弟の嫁さんだあナンボしてもわがいもんだどごで。こういうの残しどいでもジャマだてはあ。燃やしてしまてるし、全然ない。ムガシのものなんもない。ムガシのもの全部とといだんだよ。えのチヂオヤ、バッコウもなも全部自分でつぐってさ。」

乾燥・運搬・保管 ブロック状のサルケを、互いの端を重ねるようにしながら円形に積み上げた（p.140写真参照）。中は空洞にし、風通しをよくした。積み上げたものの高さは140～150cm程度で、上には藁や草の端を結んだものを、傘のように広げて掛けた。『ジイ、これ何すんの』たきや、『これの、あの、燃やすんだ』って。ああ、これ燃えるもんだべおのうって思つてたきややっぱり、つぎ（積み）がだもさ、ふち（普通）だばこうベタベタど積むんだと思つたけどの、で、母親の親がの、こういうふうに端っこだけ積んでこう、こうって、円く積んで、風入るみて、乾ぐみたい、『あれー、ジイこして積めばいいの』たきや、『こーって積めばほら、乾ぐんだ』ってさ。「問こう開けでさ、結構風が入るようにして。中は積まないの。中ないの。中さ入れれば乾かないんだ。田んぼいっぱいあ、なるんだ。高さ大体、1メートル、シゴジュウがな。だいたい、手が届く程度でやってるがら。大体乾いでくれば、上さワラ、ワラでもクサでも、頭のほうギリッと結つて、掛けで。」

使用法・用途 U氏の家では、炉でサルケを焚いた。非常に暖かかったと記憶している。暖房のほか、炊事にも用いた。サルケの熾火で魚を炙り、サルケの灰の中にジャガイモやソバモチを入れて焼いて食べた。U氏は、その風味について、電子レンジで温めるよりもおいしかったと考えている。

また、U氏の父親はさまざまなものを手作りする器用な人であったので、サルケ用のストーブも作った。トタン板を貫つてきて、筒状に曲げ、2カ所を留めたものであった。焚き口や通風孔すら開けない素朴なものであったが、使用時は、少量の薪の上にストーブの胴体を上げ、下部から空気を通るように工夫した。非常によく燃え上がるためにかえって危険であることや、煙突を付けなかったため、煙を排出できるというストーブならではの利点もなかった。普通の炉のほうが良いという結論で一致したという。

サルケのほかに燃料として用いられたのは、田の中から出てくる埋没樹木であった。父親の手作りのバッコウが埋没樹木に引っかかり、破損してしまうこともあったという。田から引き上げた樹木は、乾燥させて小さく切り、U氏も運搬を手伝った。

燃料にまつわる話は、サルケストーブやバッコウなど、U氏の父親による手作りの道具との関わりの中で語られた。「フロでもいいし、それこそ、ストーブがないときは、大っきい炉があるでしょ。炉さくべどげば、最初は煙が出るけど、少しアレせば煙がなんも出なくて、熱いアグみたいのがさ、熱いの。そうしていであつたもんだ。だいち、私だちちせどぎ、ストーブなんてねんだもの。だいたい、ストブないがら、やばりおつきい炉さやって、円ぐ燃えるみたい、こう、いつかげでこうしてでさ、燃やして、すぐ暖かかったよ。」「ご飯もなもちゃんと炊げる。ご飯でもなんでも、そのさ、煙がなくなつてしまれば、はやいどごシミ（炭）みたいになつてまつて、そごさおサガナ、焼いでみたり、いろんな、ムガシはアレほれだつた、みなジャガイモなんかよぐアグのナガさ入れて焼いで、食べだもんだ。だしてムガシあの、ソバモチだのあつたでしょ。あいうのもなもね、アグのナガさ入れてさ、焼いで食べだもの。結構おいしいのさ。だがら、イモ（ジャガイモ）でもなんでも、今の人のイモ、チンして食べるでしょ、チンして食べるよりアグさ入れだ、おいしいんだよ。ジャガイモ。だてごら辺、そのあたりサツマイモだなんてねえんだしさ。ジャガイモだけ。」「うちのチヂオヤこんだ、何でもやる人でさ、どっからかトタン貫つてきたみたいだんだねの。トタンを円ぐやってさ、ながさこうやって燃やして、ば、こんだ上さ燃えていぐわけだ。『アヤヤヤ、こいだばかえつて危ねえな』って。たらこんだ、煙突（えんとつ）つたつてないし、『ああ、これだばかえつてフツの炉のほがいないな』って。」「うんうん、こうして立てでやってさ。こんだこさ燃えて上さ。ポウポウど燃えていぐの。やっぱりほら、天井アレだし、どうしてもあまりたがくないどごで、危ないづどごで。円ぐ。こう貫つて来たんだな。一枚のトタンの板、それをこんだこう円ぐして、円ぐつてもながながでぎねどごで、針金で留めで。2箇所留めで。てで焚いたの。穴あがなくともさ、下さこんだほら、マギちよつと入れどごどごで。そのマギをあれしてどごで下がらこう、風が入つて来の。なんぼがほら、マギ、最初火焚くときマギちよつと入れないと。燃えないのさ。やっぱり自分でも色んな工夫さねば、暮らしていぐのにも大変だべし、むがしだべし。今みたい、まあ何でもはだらげば食べるんたて、むがしはだらぐどごもねんだもの。なもねえ。それがいちばんあれでつたべ。」「エのチヂオヤ、バ

ッコウもなも全部自分でつぐってさ。使わせであったしさ。まだ、木のネッコがあるの。木、こういうヒバの木が寝てるの。田んぼのながさ。埋まってるの。大体、浅いどごでだいたい30cmくらいがなあ。バッコウこうかげでいげば、つかがあれば、折れるわけさ。バッコウが。カネでねどごで、木だどごで。折れるわけ。そしてバッコウ上げればソゴさこういう木出るんだよ。オンコの木ってさ。あれはの、やっぱり田んぼのナガにもあるの。その木がの。なんつが、アガ茶色。こうなってんの。ヒバの場合だばの、上かわは腐てるけど、ナガはそのままの。あどの木だばほとんど腐ってしまってるけど。そういうながぐ持てる木だばそのままの。」「(その木を) 燃やしたりすの。だしてうちのチヂオヤ田んぼにいで、こやてグフグフてノゴで切て、で、小さくせば、ほら、私だち子どもでもでもたなげるし、そしてやて田んぼさ、積んでおいで、よその人あ、見さ来たのさ。『やあ、コラコラ、この木これ田んぼがら採たんだが』たして『うん、田んぼがら、えの田んぼがらとったんだ』てたきや、『うわあ、田んぼのナガにこえんどいるんだべがなあ』ってさ。『うん、いる、いっぱいある』って。最初の田んぼつぐったまわりは、ホントに(たくさん) あったのさ。あの、こう田んぼ植えてでも、クワで打ってでも、クワさ刺さったりしてだもだもの。それこだ、全然それこだ、田んぼつぐってるウヂに悪いもんだば腐るつつ、腐らないものはなぼでも残ってで、上げで、全部。ウヂだけだなあ、あお(あれほど) 田んぼそれごそ掘り返して、こしてマギにして、こして、まあ、やはりあの、そのマギだけでも、一冬焚げる。そう採ったもんだ。だからほら、ワダシがイヂイヂ学校さ行ったりしてれば、できないんで、けっきよぐハア、父親が具合悪くなくなってがらまるつきりハアそういうの、ほれ、前にやったのこんだ片付ねばなんねくて」

火の操作 着火の際には、少量の薪を使わないと燃えなかった。また、サルケ用に作ったストーブを使用する際には、薪の上にストーブの胴を置くことによって、風通しをよくした。「(ストーブの) 下さこんだほら、マギちょっと入れどごで。そのマギをアレしてるとごで下がらこう、風が入ってくるの。なんぼがほら、マギ、最初火焚く時マギちょっと入れないと。燃えないのさ。」

煙・臭気・灰 サルケの独特の臭気について、自分たちでは気がつかないが、他の集落へ行くと指摘されたという。また、煙がひどく、その刺激のために目は赤くなり痛かったという。「使用法・用途」の項で記したように、U氏の父親はサルケのストーブを作ったが、煙突を付けなかったため、煙や臭気に関してはメリットがなかったという。「これ(サルケ) 燃やしてる人が、何かね、私たちほら燃やしてるして、ニオイまで、気がないんだけど、あの、よその部落さでも何があって行ったりせば、あ、サルケ燃してあな。サルケのカマリしてって(笑)。よぐ言われだもんだ。ニオイするんだわ。だけどもまだ、あのサルケもまだ、あったかくて、のう。」「目、だしてあがぐなってさ。イヤイヤイヤ、サルケの煙だものっての。てでも煙がホラおもでさ出でしまれば、ただあったがくて、目もいだぐないしさ。」

その他 「あの地蔵様(土手内の地蔵堂に祀られている地蔵)をまず、昔の人はどっから拾ってきたんだとかなんだがっていう話はあるんだけど、まずこの部落にほら、なかったもんだどごで、このプラグで地蔵様やるがづので、やって。あづまるもね、だいたいそれごそ5~6人が10人程度。あまり行かないみたいだ。(ジュズ回しなどはせず)ただあちまって、食べたり、何かして、お菓子あげたり、あげるのはこっちで、集まるのは向こうの集会所の隣。」
(2015年9月23日取材)

⑩ むつ市土手内 V氏 昭和9年生まれ 女性

居住の経緯 V氏は大畑町から昭和31年に土手内へ嫁いだ。その母は、逆に栗山町(むつ市)から大畑へ嫁いだ人である。V氏の先祖は岩手から下北へ来たのだという。V氏によると、土手内地区に入植した最初の家はV家で、それから5代続いているという。「土手内(ドデウヂ)さいちばん最初におぢづいだの、〇〇の自家だべさ。そのおじいちゃんばワイは知らないって、オラ来たどぎは、そのおじいちゃんの子もだべさあの、その人で二代目だして、三代目、四代目、今家ついでるの四代目が。その子どもが五代目」「なも今みに機械ねでのお。手でばりやっして。ごさ落ち着いだ人最初苦労したと思よ。」

年代・普及 V氏が嫁いだ昭和31年当時、土手内でサルケを使用している家はわずか1軒だったという。その後数年ほどは、その家でサルケを使っていた。V家ではその頃は粉炭を使用していた。「燃やしたよ。ワ燃しねたての、オラ来たどぎさ、田んぼさ、こう四角いして、積んで、干して、××家の(のおばあさん)たきやしばらぐ燃してったよ。」「焚いでらウヂして1軒だけ。採るのは見ないけど、田んぼさ積んでいだのは見だった。で、燃やしたのもワイど、その燃やすウヂはそっちだし、ワほのウヂはほれ、昨日見だ通り店や(W商店)のずっとオグ、だして燃やしてるのは見だことないけども、そごのウヂではささ、ワイがコゴさ来てがら3年ぐらいはそのサルケをの。焚いであんでねえがあ、採って乾がして、積んでいだってして。」「いやあ、その前も、あのほれ、もっとそごのウヂばりでなぐ焚いでらウヂがあつたらしいのさ。でそれがら燃やすのが粉炭とがマギとがに変わったべたて、だしてワイが来た当時はそごのウヂ1軒だけだった。うん。」「ワイも来たどぎは、おっきいの(石炭)でねえ、ワイド、粉炭だ。」

分布・質 サルケとは、草の根が木の根とからまっているものだと認識している。「いやあれがお、草の根が木の根がくまがっているわけだ。それをさ、上のいいツヂをとっておいで、その下は草の根が木の根でくまってこういう四角いかだちにして、こいぐれの厚さにして、起ごして、それを積んで、田んぼさ乾がしておいで、それを燃やしたの。だしてニオイがほら。」

採取の時期・場所 サルケを採取した時期については記憶が曖昧である。しかし、秋の刈り入れ後ではないかと考えている。「それはわがねな。刈り取り終わってがらだみたいだ。10がづ。ムガシは早ふても9月の末ごろでねが。買ったの。10ガズの10日過ぎにイネコギしたごどあるしてさ。」

採取の方法 V氏自身は採取した経験がない。他家でおこなっている様子を見た記憶では、表土を取り除いてから、サルケを四角形に掘り起こしたという。その大きさは縦40cm、横25cm、厚さ15cm程度だった。「上のいいツヂをとっておいで、その下は草の根が木の根でくまってこういう四角いかだちにして、こいぐれの厚さにして、起ごして、それを積んで、田んぼさ乾がしておいで、それを燃やしたの。」

乾燥・運搬・保管 サルケは田に積まれていた。積み方は「レンガた積み方」だった。人の背丈よりも少し高いくらいで、上のほうは多少傾斜がついて四角錐のように見えたという。「積んでるのは、例えばこう積んでこう積んで、へてそれさまだこう積んでの。そしてこう高く、ピラミッド型ではねえたて、上のほさ行けばこうピラミッド型てんだがの。そいに見（め）だったよ。田さ積んでらの。」

煙・臭気・灰 V氏は、「いつや（一夜）寝るたてツガルシュど寝るな サルケカマリの子ができる」という盆唄を覚えている。大曲・金曲集落や土手内集落は津軽地方にルーツを持つ人々（津軽衆）が住む地域なので、盆踊りの輪にこの地域の人に加わると、南部衆は対抗意識をもってこの歌を歌い、アピールしたという。盆踊りは熊野神社（新町）に始まり、田名部まつりの最終日まで、1ヶ月ほど毎晩続いた。当時の庶民にとっての大きな楽しみであった。

祭りの期間中は、その年最後の盆踊りであることから、境内に一段と大きな踊りの輪ができ、夜通し歌い踊った³⁰⁾。神社境内の盆踊りは昭和30年代までおこなわれ、「北海盆唄」の節回しで盆唄が歌われたという³¹⁾。聞き取りの際、V氏をはじめとする土手内の地蔵講中により歌われた盆唄は、「北海盆歌」の節回しに多少のアレンジが加えられたものであった（p.144図9参照）。V氏によると、「おしまこ」のメロディーで歌ってもよいという。「盆踊りさほれ、むがしはな、テレビもねえ、なんもねえ、そういうの楽しみで、盆踊り踊りさ行て、あこのあの、神社のどごで輪になって、なんぼも輪になっての。踊ったの。そづぎほら、うだつてあれえ、ツグリウダ、うだつたべええな。それこそ、『いつや寝るたて、ツガルシュど寝るな』って。『サルケカマリの子ができる』ってさ。そういう盆ウダうだつたつて。盆ウダさの。オシマコのあれさも合わるし、つがる（違う）ウダでもなんさでも合うの。ワイどの先輩だから、70後半から、ワイはハア80越えだけど、70後半からの人だば知ってると思う。」「むがしへば盆ウダでもあった。このあれ燃やせばニオイがするの。だしてあの、おどごの人だどごでしゃべばちょっと変だべたて、盆ウダに、『いつや寝るてもツガルシュど寝るな』って。『サルケかまの子ができる』って、そういう文句の唄があったんだよ。うん。ワイど盆踊り踊るさ行ぐばの、むがしは田名部神社で1ヶ月踊ったのさ。うん、へばほれえ、それこそオマガリ（大曲）だのドデウヂ（土手内）の人ド行ったりして、輪さかたつて踊ってえべえ、へばそやして唄つての（笑）。ニオイがしみついでまってるのさ。着物さも。ウヂさ燃やすどごで全部さ煙がほれ、ストーブがない時代だものその当時は。」「ワイどがほら、田名部、でねシマヂの熊野神社がら、田名部まつりまで1ヶ月盆ウダうだつて、盆踊り踊った話したのさ。へて、ワイもこつたエツツだ人だつきや。むがし、ボンウダで、『いつや寝るたてツガルシュど寝るな サルケカマの子ができる』ってうだつたもんだつて」「それ



地蔵講の様子（プライベートに配慮し写真の一部を加工）

ごそドデウヂ（土手内）だのオマガリ（大曲）のオドゴの人どあ入つてうだつてば、わんじゃにほやしてうだつてえ、うん。ケッキョグほれ、ヤギモチ焼ぐよう。」「そやしてほれ、津軽衆のオドゴあかえつてば、こつたほれえ、ヤギモチ焼いで、南部衆のふとば、もでながすために、そやすてほれえ。」「いや彼氏ほれ、取り合い。いやこう歳いつてもさ、わけえ頃はほれえ。オドゴば好きだつたどごで、（同席の他者から「あんたばりでねんだよ。みな好きだつたんだよ」という声が入る）むがしはなもねえ、テレビもながつたし。シマヂの熊野神社は7月18、19だが。それから。そごで盆踊り踊つて。こんだ田名部まつりまで。毎い晩、盆踊りあったの。」「（この盆唄を歌つたのは）あれ



稲荷神社（土手内）

から50年ぶりだ（笑）」「子づぐりのうだだもの」。

V氏によれば、土手内集落では現在もお盆の時期には、集落の奥にある稲荷神社の境内で、おしまこや下北小唄をカセットテープで流し、盆踊りをおこなっているという。

その他 土手内の地蔵講は、毎月24日に行われている。ただし、「やっぱり男性もまじらないと面白くない。なんぼ歳とってもな（笑）」というように、偶数月には「お達者会」と称して、男性も参加しておこなわれる。地蔵講の日は、各自が土手内の地蔵堂に参拝のち、午前9時頃から約20名ほどが集会所に集まる。昔はジュズフキ（数珠まわし）も行われた。「地蔵様さあづぼるのは9時ごろから。集会所だの。地蔵様はお参りして、した順序に、集会所にあづぼるのさ。今日から拜んでる人もあるし。むがしは

そうやった（数珠まわしをした）けども今はなくなつた。だいたい、20人前後だの。何もいい話だっきゃ。（注：もしあなたがいらして話を聞いたとしても、何も、たいして面白い話なんてありませんよ、というニュアンス）」

V氏は、脇野沢出身であるが、故郷でもよくおこなわれていたイモのカナカゲを土手内でもおこなつた。カナカゲイモを干す時の一休みが小さな喜びだったという。イモノハナをとり、イモカスは捨てた。ハナは正月の餅取り粉や、ユノゴにして食べたという。ユノゴは黒砂糖で食べる人もいるが、V氏は、白砂糖を使った。また、イモと混ぜ、すいとんにして食べると「ス（シ）ナグ」なつておいしかったという。「カナカゲしてさらして、干して。それが唯一の休みだったもな。干すば、かますまで休んでねばの（笑）。（でんぷんを採って）カスは投げだ。正月にモヅつだとき、トリコつて、それをモヅあげるとぎだの、へてあの、ユノゴたてで食うての。おやつがわりだの。さど。わいど白砂糖だった。」

一方、イモノコナでは、バオリモチを作り、胡麻和えやジュネ和えにした。20年ほど前まではよく作つて食べたものだという。「いまはホントにむがしがら見だらぜいたぐすぎる暮らしだの」と語つた。（2015年9月23, 24日取材、一部2016年1月30日再確認）

㉑ むつ市田名部土手内 W氏 昭和3年生まれ 女性

居住の経緯 W氏は弘前市小友で生まれ、19歳のころ土手内に嫁いだ。

呼称 「サルケ」と呼んだ。

使用年代 土手内に嫁いだ頃（昭和22年頃）には、サルケを焚いていた。「見でるけどな。まあ、来たづぎ。」「さあ、オラだばたいしたごどもねえな。まあ、ほんとのアレだね。ちさどぎだばそいうのも焚いであつたたてな。焚いであつたよ。わんつかほれ、かつたんづばねして焚いであつたの。」

採取一大きさ・量・用具・方法 乾燥・運搬・保管

男性が掘る作業をおこない、女性はそれを見守つた。女性のなかには、掘る人もあつた。干す作業は女性がおこなつた。「女の人もするふともあるけども、干しとぎにはごんだり、だでほとんどまあ、オラだばほれ、かがす（乾かす）。掘るとぎは掘てるのば見んで。はごんだりてがあの、ほれとに。はごんだりすづぎはあつた。まんづなあ、サルケのこう積むふとまず、いっしゃこうがげでそれらこう乾かす。大変だな。まずそれでもみなやつてるしてこんなもんだべなあどもつて。」

使用法 サルケは、採暖のほかに、炊飯にも用いた。「みんなこう、あだつての。ご飯もみなあ。あつた。」

火の操作 煙・臭気・灰 火のついた炭の上にサルケを掛けて焚いた。煙はひどく、臭かつた。その臭気について、W氏は他人から指摘されたことはなかつたが、多くの人は言われたことがあるだろうと考えている。「煙はすごいなあ。してほれ、はぎにこうススみなつばでなにもおいで焚いで、それしこついで、つだらこんだこう、おかげるのさ。ニオイくせなあ。おらだばづかに言われだごどねたてほとんど言われでるんでねが。なもあづのほ道路だたて道路せめしわりしう。」（2015年9月24日取材）



土手内の地蔵様

㉒ むつ市田名部土手内 X氏 昭和6年生まれ 女性

入植の経緯・生い立ち X家は、土手内へかなり古くから入植した家であるといわれている。X氏は、土手内に生まれ、土手内で育つたため、古い時代の様子を見て育つた。「ホントのなも食べるものなもねし、ただ買るたてあれ

だし、みなウチ採たものばり食べてた」と語る。

呼称 「サルケ」と呼んだ。」

年代・普及 X氏は、サルケを使用していたのは相当昔のことで、直接関わった人はもういないだろうと考えている。「サルケだばなも話なも（笑）。サルケさ行って、サルケ干したりしたもだたてな。おかちやも知らねべえ。はああ、たげなるよ。サルケちよしたふといねぐなてまたもの。オヤマケンドのほうにいるたが。」

採取の時期と場所 サルケは、田植えが終わってから採掘した。理由は、天気の良い夏が乾燥に適しているからだという。「なづのおでんきいづぎでねば干さいねして、なづ（に採った）。田植え終わってがら。」

採取の主体 サルケの採取は男女の共同作業であった。子どもが手伝ったことはないという。「おどごの人掘るのさ。」「おどごんど採って女のふとはごんで。そしておっきぐまるぐ干すの。」「子どもどだば行がねだ（手伝いに行かないんです）。」

採取の目的 田植えが終わってから、夏場に、田地の改良（暗渠排水）をおこなう際に、サルケを採取した。排水溝には、導水のために木屑や茅などを入れて埋めた。「なづ（に採った）。田植え終わってがら。暗渠したほれ、暗渠したあどころ、田がら（サルケを）採るべえ。水捌げよぐさねばわがねどごで。それまだ埋めで、木カラ（木屑）だのなだの、茅だのいっぱい入れて、埋めで、そしてこんだ田植え終わって、（サルケの採取を）するの。」

採取の方法 タヅで切れ目を入れ、スコップで一尺四方、厚さ10cm程度に掘り採った。クワはあまり使われなかった。「(道具は)スコップどタヅ。それさ傷つけで。みな傷つけで。ちよんどこのぐれ（1尺×1尺、10cm程度）にして。ちやっこうするふともあるし、おっきぐするふともあるし。スコップで掘って。クワもつかるけど、めったにつかねな。タヅ入れて、傷はいてるどごで、カバカパど採れる。」

乾燥・運搬・保管 採取後の運搬は、女性がおこなった。風が通りやすいように真ん中をあけた形で、崩れない程度の高さに円く積んだ。乾燥させたものは非常に軽く、女性でも運べたが、子どもが手伝うことはなかったという。「(採ったあとは)たないで。女のふとんどたないで、今みに車でネゴあるわけもねし、なもねべムガシ。子どもどだば行がねだ（手伝いに行かないんです）。すぐ乾いでまるだ。乾ぎやすもの。このサルケもまだ草のネッコでも何でも入ってるとごで乾ぎやすいの。こんだ女の人手ど運んで。はごぶたて乾げばなも軽ふて軽ふて。ほんでこんだほれ、丸ごどやって、干すわけだ。丸ぐ積んで干すの。干すのはほれ、風入るいに、まながあげでおぐのさ。まながさ風入るとごで。このまんながこう、開げでおぐの。風入るいに。あんまりたがぐねな。たがぐせば崩れるどごで。」

使用一時期・場所・用具・用いた燃料と使用目的（炊事、採暖）、その道具の変遷 サルケは、炉で、木を2～3本加えて燃やした。炉に鍋をつるし、炊飯を含めた煮炊きに使用した。「それもみなエのふとど持ってって焚ぐのさ。うちのナガで燃すんだよ。燃すどごちゃんとこしらえであるの。そのサルケさなんぼが木2～3本いれで、そやして燃やす。大曲金曲のほでもみなサルケ採って焚いだもんだよ。それでもまだ何でも、もの煮るにいんだよ。食べるもの何でも（炊飯も）。ナベ。つるつだナベかげで。」

煙・臭気・灰 煙で家の中や顔が煤けてしまった。目も悪くなり、治癒を祈るために神社に行く人もあった。「やあ、ざしぎいっぺ煙だらけだ。だでみな煤けてまるって。顔も煤けてまるじゃ。あの煙だもんな。目も悪くなるし。（治癒を祈願して）宮さ行くふともあるし。」（2015年9月24日取材）

③ むつ市田名部土手内 Y氏 昭和13年生まれ 女性

使用時期・名称・燃料・使用法と用途・煙

Y氏は、横浜町に生まれ、昭和32年に土手内へ嫁いだ。その当時は、サルケを使用している人を見ておらず、薪を焚いていたという。「いやサルケは（嫁いだ頃は、周囲では使っておらず）、みなマギだった。」

父親が土手内の出身だったので、子どもの頃に父の実家に来ることがあった。中学を卒業した昭和27年ころ、土手内の〇〇家でサルケを燃やしているのを見た。四角形のもので積んであり、燃やすと煤がたくさん出て、「すごかった」ので印象に残ったという。「わほの嫁さんがそごに来て、そごのうしろの〇〇さんていで、サルケてやて燃やしてあったの見だごどはあったの。むがし。子どもでちやっこいづぎな。しかぐだこいうのこうな、こう積んでさ。それがサルケだんだってのはしかへだった。でまあ、煤いっぺ出での。すごがったたでそれで見での。うちは使ってながった。」

父親の縁もあって、のちに土手内に嫁ぐことになった。父親が暗渠排水をおこなうために田を掘る際、「サルケ」という呼称や、それが燃料として用いたことなどを教えられた。しかし、実際に使ったことはなかった。出身地の横浜町での燃料は木だった。「田んぼワほの親父暗渠するに掘るのよ。へばこれがサルケだんだよ、これ採ってみなして燃したんだよってのは親父がら聞いてだ。それ以上あど知らねもの。燃やしたこともない。（横浜は）みんな薪。炉ささ、長い木燃やして。ロバタだった。」（2015年9月24日取材）

②④ むつ市田名部土手内 Z氏 昭和11年生まれ 女性

使用時期・呼称・燃料・その他

Z氏は弘前市出身で、昭和33年に土手内に嫁いだ。土手内に母の姉妹がいる縁で、弘前から土手内へと嫁いだ。当時の土手内地区は、現在のように道路が整備されておらず、雨が降るとドロドロの状態で、「サルケ」を見たことはないが、嫁ぎ先の義父から話には聞いた。嫁いだ当時は、薪ストーブで薪を焚いていた。義父の時代には、サルケを使用していたという。「(サルケについては) アイドントノー。私は弘前出身。(個人情報につき中略)ただ、この母親どワダシの母親ど姉妹だったはんで。ながながちこさ嫁ぐ人がねみたいで。やれそれ行げーって。今の人みたいにして好きなといる世のながど違っ、親の言うこと聞かないと、敷居またがせねえって。ごこのZ家づどごさ33年にごさきたの。で、全然そのづぎはウヂではマギストーブで、ただサルケは燃してるっておじいさんがら聞いてあったけども、品物は見だごどもない。話はおじいさんはよぐの、『サルケはうちでも互いに積んだりして燃したことはあるけども、山もあったがら、今はマギ燃してる』って。全然そういうの品物は見だごどもない。弘前のほうは全然そういうのやってないがら。(嫁いだ頃は) 道路もこういう道路でながったし、子どもど学校さ行く雨降た次の日になって長靴履がないとき、ジョブジョブジョブってドロドロってさ。ヤァいづごこのウヂがら、この部落がら逃げでいったらいいがなあって思ったりして(笑)。」

昔は実家のある弘前へ行くのが楽しみのひとつでもあったが、年をとったため、おっくうになった。また、舅姑も主人も亡くなり、家で過ごすよりも、気の置けない仲間と共に過ごせる地蔵講の集まりを、毎月楽しみにしている。「今ウヂさいるよりもごごにいだほうが楽しいきゃ。ナガマいっぱいあるしね。年はいま79歳なったけど。ナガマがあるがら私は楽しいね。今日の24日は毎月ね。毎月やってます。あの地蔵様丁寧に掃除して、だいたい当番決めて今日は何班、何班って。当番でやって出しあって。いろいろバガバナシしたりね。楽しみにしてる。私もね、歳いげばやっぱりながなが弘前さ行くっても大儀でさ。ムガシは車で行ったけど、今歳だがらさ。下北もまだ住めばいいごごなんだけどジモドさ行げばまださ、近くになんでもあるしね。ごごただしさ、町さ近いでしょ。土手内はね。だして同じ農家こうやって今田んぼとが全然ハダゲほら野菜がいぐらがずづみな作ってそしてわだしらもずっとショッピングさつとめであったがらね。何十年もつとめで。そして農家づのやってこながったがらさ。やるごども全然しらねんだけども。いまワダシもごごへツヂうるんだけども、ま今は楽しぐ暮らしています。」「ワダシらみみたいな歳はさみなタビがら来てるがらさ。ドデウヂの地域のこどってばほんとに生まれ育った人でねば今ごろの歳ごろだばちょっとわがらねんでねがね。子どもの頃でもそういうキオグがあればわかるたって。」(2015年9月24日取材)

②⑤ むつ市田名部土手内 α氏 昭和13年生まれ 女性

居住の経緯・用いた燃料

α氏は、北海道岩見沢出身。岩見沢も泥炭の豊富な土地であるが、α氏自身は泥炭を見たことも聞いたこともなく、石炭を焚いていたという。嫁いだ昭和42年当時、土手内では薪ストーブを使用していたという。「サルケ。サルケわがらないね。わ、北海道だがら。」「(泥炭は)使ってないねえ。(出身は)岩見沢ちゅうとこだね。」「いや、そういうの(泥炭のようなものは)使ってね。石炭使ってた。石炭。石炭専用のストーブだよ。」

(2015年9月24日取材)

②⑥ むつ市田名部土手内 β氏 昭和8年生まれ 女性

居住の経緯・呼称・採取の場所・燃料・用途・煙・その他

β氏は、最花地区から昭和26年に土手内に嫁いだ。当時、サルケを使用していた家もあったようだが、β氏の嫁ぎ先では使用していなかった。炉で薪を焚いた。炊事は炉でナベを吊しておこなった。そのナベは一度に十数人分の飯を炊けるほどの大きさだったという。飯支度はシュウドサマや兄嫁や兄夫婦の娘がおこない、β氏夫婦は仕事に専念した。薪ストーブを使用するようになってからは、ツバガマを使用した。

田のほうで、乾燥したサルケを見たことはあった。スポンジのようなもので、燃やすと煙が出ると聞いていたので、β氏の家では使用しなかったという。「(サルケを見たことや使ったことは)ないです。来たどぎ、ハアそんなの何もねえ。ワド来てからさサルケねえ。あるごとはあったべたてウヂでは焚がねがったな。(嫁ぎ先で焚いていたのは)マギ。木。やってるふとあやってたよ。でもウヂではサルケ焚いだづのは知らねえ。焚いだのは見ねけどサルケそのものはわかるよ。ポフポフってなあ。スポンジみたいたもんだもの。干したのだけばれえ、ポフポフてな。田んぼのほさ行げばな。スポンジみたいたった。たてあれ燃やせばエの中ほら、煙して燃やさねがった。マギだけ焚いであった。マギストーブはまだねがったけども炉さほれ。どやして(飯を)焚いだべの。ナベ。ナベつるして焚いだべの。それさアレあの、マギストブ焚ぐよになってがらだばほれツバガマでのご飯炊いだけどな。その前は吊してナベこうぶらさげで、おっきいナベだよウヂだつきゃ13も14人もいであって、おっきいナベでご飯炊いで、ワ焚がねもの。ケッキョグ、シュドサマだのほれ、どあご飯したぐして。ワイどただソドにいでシゴドすだけだして、うん。エさ帰ってくばほれ、ご飯食べるアレだして。やたごたあね。まんだわがいうちだばご飯したぐしたごたあね。親ど